

---

# 鉄の雨

白銀

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

鉄の雨

### 【Nコード】

N7268C

### 【作者名】

白銀

### 【あらすじ】

雨が降り続くこの街に、この世界に、嫌気が差した。当ても無く走り続けていた少年の耳に、歌声が、聞こえた。

歌が聞こえた。

アと、ラと、ルの、たった三つ音だけで紡がれる歌だ。

楽器は無い。

しかし、それはとても綺麗な歌だった。

薄暗い部屋の中で、少女は一人で歌っていた。

背の半分ほどの台に座り、真っ白なワンピースを身につけ、亜麻色の髪を僅かに揺らして。

どこか寂しげな表情で、少女は歌を紡ぐ。歌声は美しく、澄んでいる。部屋の中に歌声が響く。金属の壁は声を反射し、まるでエコーがかかったかのように少女に続いて歌っていた。

部屋で唯一の入り口に少年は立っていた。

ボサボサの黒髪は雨で顔に張り付き、泥だらけのシャツとズボンもびしょ濡れだった。息も上がっている。

少年はただ目を丸くして、呆然と歌う少女を見つめていた。

不意に、歌が止んだ。

「どうしたの？」

少女が問う。

薄暗い部屋の中で、少女の視線が入り口に向かう。

少年は何も答えられなかった。問いかけられたことが判らなかったのかもしれない。

薄暗くはあったが、何も見えないほどではなかった。少年には少女の姿が見えていた。逆に、少女からも少年は見えていた。

少年の視線は少女の目を見つめていた。

長い睫毛に、哀しげに細められた瞼。微かに光を湛えて、瞳が揺れている。

沈黙が続く。

少年は何も考えられず、ただ少女を見つめていた。

答えが返ってこないことを悟ったのか、少女は少年から視線を逸らすと口を開いた。

再び、歌が紡がれ始める。

「あ……」

少年が発した声に、歌が止む。

ゆっくりと、少女は少年に目を向けた。

「なんで、こんなところにいるの？」

問いに答えられなかった少年は、逆に少女へ問いを発していた。

少女の問いは、少年には難しかった。部屋に入って来た少年に対して、「誰？」と問うでもなく、「どうしてここにいるの？」と問うでもなく、少女は「どうしたの？」と尋ねた。

何故、少女がそんな問いを放ったのか、少年には理解できなかった。だから、答えも出せなかった。

「じゃあ、どうしてここに来たの？」

くすりと笑って、少女は少年に問いを返す。

「僕は……」

少年が言葉に詰まる。

少女は何も言わず、答えを待つ。

びしょびしょの服に、濡れた髪。裾や顎から水滴を垂らしながら、少年は言葉を選んでいるようだった。

「歌が、聞こえたから」

少年の言葉に、少女は少しだけ目を見開いた。

「僕、逃げて来たんだ」

少しだけ迷いながら、少年が語り出す。

「何もかも、厭になって……」

少年は俯いた。

外は雨が降り続けている。

止むことのない雨だ。少年は生まれてから一度も晴れた空を見たことがない。雨は、少年が生まれる前からずっと降り続けている。

「走って、転んで、息が上がって……」

少年は顔を上げた。

「気がついたら、歌が聞こえたんだ」

少女は少年を見つめている。

「綺麗な歌だと思った」

「だけど、そう言っただけで少年は言葉を区切り、ゆっくりと足を前に運んだ。」

「哀しそうだった」

少年は真つ直ぐに少女を見つめた。

「だから、歌っている人に会いたかった。少年の眼はそう告げていた。全てが厭になつて、ただ一人逃げ出した自分と、どこか似ている気がしたから。」

「そう……」

少女は少年を見返して、微笑んだ。

「私はね、ここにいないといけないの」

問いへの答えを、少女は囁いた。

ゆっくりと歩いてくる少年を見つめ、少女は優しく目を細める。

少年の足が止まった。目を見開き、一度、少女の顔を見上げる。

少年の視線は、彼女の後ろへと向かっていた。

「私がいないと、皆が困るから」

「寂しげに微笑む少女の背後には、いくつものチューブが伸びていた。」

「チューブは壁から少女の背中へと伸びている。少年から少女の背中は見ることができない。」

「だが、もし見ることができたなら、少女の背中にはいくつものチューブが突き刺さっていたことだろう。そうとしか思えなかった。部屋の中には少女しかいないのだ。彼女が座っている台はあるが、チューブは少女の背中にしか向かっていない。台の後ろへ向かうチューブは見あたらなかった。」

「雨は、嫌い？」

少女の問いに、少年は答えられなかった。

信じられないものを見ているかのように、呆然としていた。

「私が、降らせているの」

少女の言葉が、少年には理解できなかった。

「遠い昔に、大きな戦争があったの。空のずっと上、宇宙で、人は戦っていたの」

静かな声が部屋に響く。

「戦いは終わったけれど、大勢の人が死んでしまったの。自然も消えて、空からは戦いの残骸、鉄の雨が降り続けている」

哀しげな声で少女は語る。

「人は、街を覆うように壁を造って、鉄の雨を凌いでいるの」

残骸の雨の中では、人は生きていけない。生活の場を確保するために、生き残った人々を守るために、空を覆う壁が造られた。

「だから、私は雨を降らせるの」

大きな戦争によって、有害な放射線を遮る大気層の多くが破壊されてしまった。戦いの残骸は壁で遮ることができた。だが、放射線だけは壁を透過してしまう。地上に残された文明と資源だけでは、放射線を無害化する機能を壁に持たせることができなかったのだ。

放射線を無害なものに変えるため、人々は雨を降らせた。閉鎖空間の中に雨を降らせ、放射線を減衰させて無害なレベルまで下げている。

「私がいないと、街は滅びてしまうから」

雨量の調節と、閉鎖空間の環境を整える存在が必要になった。それに彼女が選ばれた。

身体のほとんどを機械化され、少女は生体コンピュータとして環境管理システムの核とされたのだ。

幼い少年には、彼女の言葉はほとんど理解できなかった。

「一人で、寂しくないの？」

少年は問う。

少女の身体は華奢だった。肌は透き通るように白い。

「私にしか、できないから」

少女は微笑んだ。ただ、その笑みはどこか哀しげなものだった。たとえ寂しくても、少女はここを動くことを許されない。

「そんなの、おかしいよ……」

少年の表情が曇る。

少女は驚いたように少年を見つめた。

「だって、君はここに居るのが厭なんですよ？」

少年の言葉に、少女は答えなかった。いや、答えることができなかったのかもしれない。

「厭なのに、どうしてここに居るの？」

「私がいないと、皆が困るから……」

力なく、少女が答える。

「そんなのおかしい！」

少年は叫ぶように訴えた。

「誰かが我慢しないと皆が喜べないなんておかしいよ！」

少女が目丸くする。

少年は真っ直ぐに少女を見つめていた。瞳には光が見える。揺るぎない、光が。

「僕は、それが厭で飛び出して来たんだ。皆、本当は厭なと思ってるのに他の方法を探そうとしないんだ！」

少年が叫んだ直後、部屋の中に光が差し込んだ。

入り口に、ライトを手にした男達が立っていた。

「何故ここに居る！ ここは立ち入り禁止と書いてあったはずだ！」

男達は少年に駆け寄ると腕を掴んだ。

「ねえ

「さあ、帰るんだ！」

言葉を遮って、男が少年の腕を引く。

子供の力では大人に勝てない。どんなに嫌がっても、少年は大人達に引き摺られてしまう。暴れても、少年一人の力では大人たちに抗うことはできなかった。

「放してよ！ まだ話がしたいんだ！」

「ここはお前がいて良い場所じゃない！」

嫌がる少年を大人達は強引に引き摺って行く。

少女はその光景から目を逸らしていた。

最初から、少年が連れていかれると知っていたのだろう。この場所は街の外れにある。周囲には何もなく、誰も近寄らない場所だ。

同時に、少女を守るために監視されている場所でもある。

もう何年もこの場所に訪れる者はいなかった。だから、監視の目が緩んでいたのかもしれない。本来なら、この場所に辿り着く前に警備の者たちが侵入を防いでいたはずだ。

「迎えに行くから！」

少年が叫んだ。

少女は驚いて、視線を少年に向ける。

「絶対、僕が君を迎えに行くから！」

必死になつて、少年は声を張り上げる。腹の底から、力一杯、叫んでいた。

「僕が……！」

大人たちが少年の口を塞ぎ、部屋の外へと引き摺り出した。もがく少年を数人がかりで抱え上げ、大人たちは去って行く。

「……今日のことは忘れるんだ」

部屋に残った一人の男が、静かに告げた。

「はい……」

少女は静かに頷いた。そつと、表情を隠すように。

残った男が部屋を出て行く。

一人へ戻った少女は胸に手をあてる。少年の言葉が残っている。

少女の言葉を聞いても、仕方ないとは考えない少年の言葉だ。いや、仕方ないと考えたくないのかもしれない。

目を閉じて、少女は歌を紡いだ。少しだけ、明るい歌を。

彼女は初めて、大人の命令に従わなかった。

薄暗い部屋の入り口に、一人の青年が立っていた。

「あ……」

少女には、彼が誰なのか直ぐに判った。ボサボサの黒髪に、光を湛えた瞳。優しげな眼差しで、少女を見つめている。

「俺のこと、憶えてるかな？」

青年は優しく微笑んだ。

一歩ずつ、少女へと歩み寄る。

「私……」

青年は優しく首を振る。

「もう、我慢しなくていいんだ」

少女は、ゆっくりと歩いてくる青年を見つめていた。

「鉄の雨は、もう止んだから」

空から降り注ぐ残骸も、放射線の問題も解決した。閉鎖空間で生きる必要がなくなったのだ。

「一緒に、行こう」

青年は微笑み、少女に手を差し伸べる。

「私、もう人間じゃないから……」

少女は俯く。彼女の身体はそのほとんどが機械化されている。この場所にいることだけが少女の使命だった。役割が終わったのなら、少女の存在価値は無に等しい。

「言っただろ？ もう我慢しなくていいんだって」

優しい声に、少女が顔を上げる。

青年は手を差し出したまま、微笑んでいた。

「迎えに来たんだ」

その瞬間、少女の瞳に涙が溢れた。

「晴れた空を見に行こう」

「うん」

少女は笑った。青年の手を取り、台から下りる。背中に取り付けられたチューブやコードが外れるのも構わずに。

## 鉄の雨

暗い通路を、青年は少女の手を引いて走り出す。  
近付いてくる通路の出口からは、光が溢れていた。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7268c/>

---

鉄の雨

2008年11月7日08時53分発行